

Title	ノーマン・L・スタンプス著『デモクラシーの挫折』： 現代獨裁の諸原因に関する批判的評價
Sub Title	Norman L. Stamps : Why democracies fail
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.5 (1960. 5) ,p.75- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600515-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Norman L. Stamps :

Why Democracies Fail

*A Critical Evaluation of the Causes
of Modern Dictatorships*

University of Notre Dame Press, 1957,

xxvi, 182 pp.

ノーマン・L・スタンプス著

『デモクラシーの挫折』

——現代獨裁の諸原因に關する批判的評價——

第一次大戦後の二十年間は、デモクラシーの實驗と失敗の年代記によつて綴られている。一九三八年までには、中歐および東歐、地中海沿岸諸國のほとんどが、獨裁の支配形態に服していつた。大戦の終結によつて齎されるかにみえたデモクラシーの勝利と榮光は、楽しい記憶としてよりも、悲しい幻滅として殘されることとなつた。デモクラシーは挫折してしまつたのである。忌むしいことに、われわれは、獨裁の復活によつて、デモクラシーの根本的缺陷をより一層適確に知らされたわけである。歴史の教訓というものは、われわれは歴史からなにも學ぶことができないことである、といわれ

紹介と批評

るが、第一次大戦後のヨーロッパの體験をふりかえるとき、それは、なぜデモクラシーはかくも短命であるかを、より眞實にわれわれに教えているかに思われる。

現代獨裁の研究は、最近にいたつて、社會科學者の多大の關心をひきつけてきた。そのテーマはきわめて平明なようであるけれども、その複雑多岐な現象の解明には、いちじるしい困難がともなつている。まず、事實のディテイルすら、充分あきらかにされているとはいえない。しかも事實の考察となると、もはや即物性が容易でない。獨裁の原因を追求すること自體が、獨裁の本質をどう把握するか、ないしはすべきか、という解釋の問題と不可分に結びつく。多くの研究のあいだには、見解の不一致が生じ、有効な議論をも阻害する傾向に導かれることもしばしばである。

スタンプス教授の本書は、かかる研究状態に對して、政治學者、經濟學者、社會學者、心理學者がこれまでおこなつてきた多彩な研究オリエンテーションについて、再考を迫るものである。「それゆゑ、本研究の目的は、デモクラシーの挫折と獨裁の勃興について、他の人びとによつて提供された主要な説明を討議することである。著者は、あたらしい理論、または全面的な説明を發展させようとしたのではなく、既存の諸理論がどの程度、そしてどの範圍で、有益であり、かつ妥當な説明をあたえているか、を決定しようとして試みた

のである。」

本書は、最初の二章（デモクラシーの挫折、近代國民國家の發展）がいわばプロローグをなし、ヨーロッパにおける國家の發展段階を素描する。第三章において、第二次大戰發端以前に、ヨーロッパに作用していた獨裁の諸類型を、その性格の基本的差異をもとにし、三つに分類している。君主獨裁（ユーゴースラヴィアのアレクサンダー王、ブルガリアのボリス王、ルーマニアのカロル王など）、軍事獨裁（トルコのケマル・パシア、ポーランドのピルスツキー、スペインのフランコなど）、および一黨獨裁（ナチ・ドイツ、ファシスト・イタリア、ポリシエヴィキ・ロシア）がこれである。第四章から第八章までが本書の主要部分で、獨裁の諸原因に關する分析にあてられている。最後の二章（デモクラシーの性質、デモクラシーの將來）は、デモクラシーが、以上あきらかにされたその根底にひそむ政治的疾病をよく切り抜けるかどうか、第二次大戰後のヨーロッパ諸國、とくに、ドイツ、フランスのデモクラシーの機能化を検討しながら、ふたたび西歐の傳統的價值を刻明化し、本書のエピローグとしている。したがつて、ここでの議論の焦點は、第四章以下五つの章である。

スタンプスの議論は、大別すると、四つに分けることができる。

第一は、政治機構としてのデモクラシーが、ヨーロッパに導入さ

れ、なぜ挫折せざるをえなかつたか、という問題である。このことは、デモクラシーそのものに、獨裁の直接的原因が内在しているかのような疑惑をあたえる。しかしながら、この點は、第一次大戰後のヨーロッパ諸國の特殊的條件を考慮しなければならない。代表制デモクラシーをとつた國々は、十九世紀的イギリスの機構概念に従順すぎ、政府の行政機能、官僚制を議會のコントロールのもとにおくことに腐心した。これは、政治的未經驗にもよるが、なによりも、ヨーロッパにおいては、歴史的に執行機關の絕對主義的傾斜への恐怖が強く、その嫉妬が全能なる議會というイメージを抱かせてしまつたのである。その結果、政府の活動範圍が阻止され、その非能率、無能力を曝けだしてしまつた。すでにイギリスにおいては、十九世紀後半から、現代の社會・經濟的問題の急激な増大にともなつて、それらの能率的な處理の必要上、執行部の機能の強化への變革をとげてきた。そして、鞏固な政黨の組織化と二大政黨制の確立とによつて、強力な内閣、責任ある政府を漸次つくりあげていつた。したがつて、ヨーロッパのデモクラシーは、政治機構として、時代の要求に對應しえぬ逆機能を果していたわけで、獨裁のリーダーシップへの道を不可避ならしめたのである。

さらに、獨裁の擡頭した國々では、議會政治の前提である政黨が充分發達せず、議會の機能を喪失せしめたことに、重大な缺陷が指

摘されている。よく知られているように、ドイツ、イタリアの議會は、つねに多數の政黨が分裂對立し、政黨の連合による内閣は、なから政策を實行する政治的責任をもつていなかった。かかる政治的膠着狀態こそ、國民をして極度の不快感をもよおさせ、議會政治を閉めだした急進政黨に、喝采を送らせてしまった。兩國とも、多數決原理の代表制に失敗したのは、比例代表制に決定的要因がある、といわれる。だが同時にまた、ヨーロッパにおける政黨は、政治哲學、イデオロギーを核とする、いわゆる世界觀政黨であつた點も、特徴的である。

デモクラシーというものは、もつともデリケートな政治である。その成長のためには、イギリスの場合のように、永年の經驗と努力が必要である。しかもその實驗成功のためには、比較的安定した條件がととのつていなければならない。當時のヨーロッパにおけるように、強度の社會不安、危機的状況のシークエンスのもとでは、デモクラシーの實驗操作がひじょうに不向きであつた。

以上みたように、政治機構としてのデモクラシーの問題は、客觀的に把えうるし、誤つた解釋のいり込む餘地も少ない。しかし、獨裁の諸原因をさらに社會・經濟的關係、心理的意識構造にまで掘り上げると、幅も廣く、奥行きも深くなる。ここでは、さまざまな解釋がおこなわれたことも當然である。スタンプスは、獨裁の經濟的解

釋、現代社會構造上の解釋、心理學的解釋をあげている。彼の議論も、それ程嚴密に輪廓づけられていないようである。これらの解釋についての説明は、ここに詳細をつくす必要はないであらうから、以下には、スタンプスの批判的見解のいくつかを記述しておく。

獨裁の原因を、社會階級との連關において把握する解釋が一般的である。いうまでもなく、マルクス主義理論がそのもつとも重要なものである。獨占資本主義の獨裁への移行というテーゼは、ナチズムおよびファシズムについて論じられている（J・ストレイチ、R・ブラディ）。同じようなことは、獨裁が資本家の利益に支持された大衆操作のプロパガンダによるものである。あるいは、資本家の利益のために仕組まれたプロットである、という議論にも見受けられる。スタンプスによれば、これらの主張は、まさに證明しようとするものそのものが前提とされている。結果的には、ナチスやファシストが權力掌握後、經濟的支配層に利益をあたえるような方策をとつたとはいへ、その事實がじつさいそうであつたかは論争の餘地があり、またそのことのみで、大衆支持の獲得をよく説明しえぬことももちろんである。たとえば、一九三〇年のドイツについて、各政黨の歳費をみて（社會民主黨の一、五〇〇萬マルク、ドイツ人民黨の六一七〇〇萬マルク、ナチスの五〇〇萬マルク、中央黨の一五〇萬マルク、民主黨、共產黨の各一〇〇萬マルク）、ナチスが大

資本家による財政援助を受けていたわけではなく、とりたてて優勢な地位にあつたのではない。財政援助がなされるようになったのは、その運動がすでに成功を収めてから後のことであつた。

下層中産階級の反抗として獨裁の原因を證明する試みは、すぐれた證據をあたえているように思われる。H・ラスウェル等によつて明確にされているように、下層中産階級は、プロレタリアートおよびマルクス主義者との反對闘争において、ヒットラー主義への積極的要素となつていた。ところが、スタンプスは、ナチス・ファシストの黨員構成と職業構成の比率（R・ベンディックス「社會成層と政治權力」アメリカ政治學評論、一九五二年六月による）を参照し、それがいずれも、社會階層のすべてにわたつていることを指摘している。さらに、ドイツにおける選舉の統計的研究によつてみても、ナチズムが本質的に中産階級の運動であることは疑わしい。すなわち、一九二八年の選舉で、ナチスは八一〇、一二七票、ライヒスタークに一二議席を得たのみである。一九三〇年の選舉には、六、三七九、六七二票、一〇七議席に躍進した。この選舉では、前に棄權していたもの約二、四四四、九九〇名が投票し、あらたに選舉資格を得たもの一、七五八、二三四名が加わつてゐる。共産黨は今回、一、三二五、三六七票以前より多く獲得した。カトリック中央黨その他は一〇〇萬餘計に獲得した。票數を失つたものは、

民主黨二七萬、ドイツ國家人民黨約二〇〇萬である。とすると、ナチスの獲得票は、このあらたに参加した約四二〇萬名と、右派の國家主義政黨支持者の移動票とによることはあきらかである。

一九三二年の選舉では、ナチスは一三、七六五、七八一票、二三〇議席を得て、ほぼ倍増した。このときには、中産階級の經濟的不安定、心理的貧困がナチスを助長したことは確實である。けれども、スタンプスは、一九三〇年の選舉が黨を大衆運動へ轉化させた根源的起動因である、とみなす。今日、あらたに選舉に参加したものの社會構成を知ることが不可能であるといつても、それが全部中産階級であるとは斷言できない。投票行動の研究が示すところによれば、政治的アパシーは、民衆の全階層に彌滿しているものであつて、その頻度は、教育と収入の少ないものにおきる、という。この基礎にたてば、ナチスに投票したものの、とくに二八年に棄權していた選舉人の大多數は、中産階級よりもむしろ労働者階級であつたと推定しても差支えなさそうである。いづれにせよ、現代獨裁が大衆運動として展開された理由は、それがあらゆる社會集團、ないしは階級に訴えをもつたからにはかならず、理論的にいうと、それは、國家的利益の名のもとに、そしてその概念に對して、階級の特殊的利益を犠牲に供したところに成立したのである。W・レブケがいうように、「ナチ獨裁の顯著な特徴は、それがどんな階級とも完

全に分離していたことである。」

つぎに、現在有力な理論のひとつに、西歐文明、とりわけ、産業社會に固有な諸條件に對するリアクションとして、デモクラシーの内部から獨裁の形成が必然化される、という議論がある。「もし一般に自動人形化した人間の無意識的な苦惱をみおとすならば、われわれはわれわれの文化をその人間の基礎からおびやかしている危険をみぬくことに失敗するであろう。すなわち、もし興奮を約束し、個人の生活に意味と秩序とを確實にあたえろと思われ政治的機構やシンボルが提供されるならば、どんなイデオロギーや指導者でも喜んで受け入れようとする危険である。人間機械の絶望が、ファシズムの政治的目的を育てる豊かな土壌なのである」と、E・フロムは述べている（『自由からの逃走』邦譯、二八二頁）。このように、現代社會における個人は、みずからの生活環境のあらゆる面で、たがいに孤立化し、自我を喪失している。共同社會の感情を失つた個人は、他方において、多數の利害集團へと吸収され、分裂をさらに決定的なものとする。さらに、現代國家はことに、その經濟的機能の増大につれ、巨大な官僚機構を發展させ、個人の自由に重壓をかけたつがある。これらの諸條件は、以前のどの時代より、獨裁的權力の出現を容易にしている。世論という匿名の權威は、強力な指導者に對する依存、はては、煽動者の暴舉をも許してしまう危険を内藏

しているといえよう。

最後に、獨裁の心理學的解釋である。現代の大衆化的狀況における心理は、リーダーシップの強力な磁場に捉えられやすく、カリスマ的指導者への復歸がみられることは否定できない。カリスマへの情緒的期待は、ヒットラー、ムッソリーニ、スターリンのごとき獨裁的權力者に限らず、フランクリン・ローズヴェルトにもあらわれていた。カリスマ的指導者という概念は、M・ウェーバーによる貢獻に負うている。だが、獨裁の研究において、社會學にもまして精彩を放つているのは、精神分析理論である。周知の通り、パーソナリティの性格形成と社會的條件とを結合した、社會心理學的アプローチは、フロム、キャントリルなどの貢獻によつて、フロイト理論の適應にあらたな方向をみいだした。文化類型の精神分析的解釋としては、たとえば、ナチズムに關するライツケスケメッテイのすぐれた研究がある。

スタンプスは、これらの研究成果は、“prove anything”との非難をまぬかれないとし、その《病理學的》偏見や決定論への偏執に、かなり厳しい批判をくだしている。一例をあげると、ドイツ社會の權威主義的側面とナチズムとを關連づけようとするものは、自我の幼児期の體験というものを強調し、ドイツの家族構造の權威主義的類型を引き合いにだす。そして、このような環境に育つた子

供は屈從的であり、ナチズムに馴化されやすい、という。がしかし、この論議は事實の承認を受けていない。ナチスはドイツ家族に政治的信頼をおくどころか、その權威を弱體化し、影響力を破壊するような政策をとつた。ナチスは子供を青年運動へ組織化し、両親をスパイすることを奨励し、家族の外側にある權威的象徴に對する服従を強制したのであつた。

もうひとつ例をひこう。精神分析の方法を使用するのは、みな同じようにしているのではなく、事實に關しても一致していないのである。ヒットラーは父親と同様、母親も好きだつた、というのは、彼女は「チエック訛りでしゃべつたからだ」(F・シューマン)といわれる。それに反して、ヒットラーは母親を愛したが、父親を憎んでいた、そこには「エディップス・コンプレックス」が認められる(G・ギルバート)ともいわれる。このように、まつたく矛盾した見解が示されるのは、精神分析の方法に難點があるからではなく、それを使用するものの不手際によるのであろう。スタンプスは、「あたらしい方法」を適用しようとする熱狂的な欲求は、主題へのこの「アプローチ」の妥當性を例證せんがために、事實を虚構し、あるいは、事實を誤述することに導くであろう。結局のところ、データの綿密な積み重ねにかわるものではなく、獨裁の勃興を説明するあたらしい「概念的枠組」を採用しようとする無理するいわれは

ない。精神分析によつて築かれた人間行動に關するデータに、なにも價値がないというのではない。われわれが注意すべきことは、餘りにスウィーピングな一般化を抽き出すことである。

上述したように、スタンプスの批判的評價は、きわめて妥當なものと思われる。政治機構、社會・經濟的構造、社會心理學、これらは全體として、獨裁の原因を説明できるものであるし、また、現代デモクラシーの危機も、それらのアプローチに基づく複眼的視角によつて理解しうるものである。しかしながら、スタンプスが言及していない重要な問題領域がひとつある。それは、現代獨裁の成立にとつて、國內的危機はさることながら、國際關係における對外的危機というものが、たんに政府の外交政策の問題としてばかりでなく、國民感情的エネルギーの爆發として、見逃がすことのできない契機をなしている、ということである。われわれは、國際政治にまで、分析視角を擴大しなければ充分といえないであらう。

「獨裁に關する著作の多くは、抽象化の使用を含んでいるが、それらは、餘り遠くまで推しすすめない限り、ドグマティックな確信ありげに提示されない限り、若干の有効性をもつものである。たとえば、ファシズムは下層中産階級の反抗であつたと論ずるものも、他の集團はその運動に引寄せられなかつたとか、中産階級の全員がその支持者であつたとか、まさかいうわけではあるまい。そういう

た概念は便宜上の抽象化にすぎず、それが有用であるかどうか、そしてどの程度にそうかということは、問題がおきるのである。大量計算や包括的抽象化の背後には、苦惱し希望をもつリアルな人びとが、ふりかかる出来事に關係をもつ個々の家族が、つねにいたのである。ここに示した分析が示唆することは、これらの一般化の多くを棄てて、そのかわりに、じつさいになにがおこったかを忠實に説明することにより、よりよき理解に到達しうるのである、ということである。」

右の言葉は、スタンプスの據つてたつ批判基準を、結論的に表現したものと見える。本書の序論に、ノートル・ダム大學教授F・ハーメンスがいつているように、徒らに、獨創性オリジナリティを求めることは、社會科學の科學的未成熟未成熟のしるしであるかも知れぬ。たしかに、われわれの重要な課題は、事實證據の精査精査ということであろう。だが、歸納的的堆積堆積というものは、理論的構成を前提とし、またそれなくしては解體してしまう。事實の探究そのものは、理論の誤謬を發見してはじめて、意味あることである。

(奈良和重)